

「脱少子化フォーラム2006」を、平成18年7月16日深川江戸資料館において開催しました。今回のフォーラムは単に家庭出産を取り扱ったものではなく、お産の現場から少子化問題を考えようと呼びかけました。

基調講演は、「子をもつ喜びと本来のお産の在り方」と題し発表しました。当助産所では、お母さん達が平均2.3人子どもを出産します。昨年の日本の合計特殊出生率（女性が一生に生む子どもの数）が1.25ですから、これを大きく上回ります。特に東京都では1.0を切っている中での2.3という数字なので驚異的だといえます。

家庭出産の体験発表では、お母さん・お父さんそれぞれの立場から、こどもをもつ事と子育ての喜びを語っていただきました。健全な家庭を持つ為には、父親の役割の大切さ、良い夫婦関係が基本であり、家族の絆を大切にしてお産は、脱少子化に大きな可能性を秘めているといえるでしょう。

最後のパネルディスカッションでは政治・医学・芸能文化・宗教と多方面の方々からご意見をいただきました。「少子化」というと、まず経済負担の軽減や制度の整備という議論になりますが果たしてそうでしょうか？戦後、家族の姿が大きく変わってしまいました。「団塊の世代」と呼ばれる戦後の第1次ベビーブーマーたちは「親からの自立」を掲げて親と同居しないという新しい価値観が生まれました。「一家断絶」「親子断絶」「ニューファミリー」という言葉も誕生し、親子三世代の同居を前提にした家族制度は崩壊しました。その一方で、家族の繋がりは薄くなり、親が子に愛情を注いだり、子が親や祖父母を大切にする姿がみられなくなりつつあります。身近な人を大切にする心、敬う心がなければ、目にみえない祖先に対して思いやりの心を持つことは叶いません。当然、以前見られたような子孫を残し、家をつたえていくという意識も無くなってしまったのです。

つまり必要な事は心・精神であり、個人主義・利己主義を改め、夫婦一体・親子一体・先祖を敬う事を地道に進めて行く事が大切です。そしてそれが少子化問題から脱却し、国が良くなる事につながると信じています。